
辻斬り

Tomiono

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
辻斬り

【Nコード】
N6431E

【作者名】
Tomionno

【あらすじ】
江戸時代前期、とある藩には神出鬼没の辻斬りがいるとのこと、全国から腕利きの武士たちが募られた。ある日その藩の町を訪れた二人の武士、高倉と沖野は、周りで次々武士が消えていく中、驚く事実を発見する・・・！

（前書き）

これはまあ友達とお題を出し合って、辞書から適当にキーワードをひいて、それを元にした作品です。二日で書き終えました。キーワードは「撓める」、「世知辛い」、そして「遣り遂げる」だっと思います。

時代は江戸時代前期である。藩の一つのとある町に、よく辻斬り、または強盗が現れるとの噂であった。この辻斬り、または辻斬り達は神出鬼没で、また藩のどんなに屈強なものを向けようと、必ず斬られていたとのことであった。大名は困り果てて、諸藩から武人を募った。

自分の名誉を少しでもあげようと、全国から欲張りなもの、誠実なもの、侍に道場破り、自分たちの腕に自信があるものが沢山集まった。

そして、近くの藩から問題の辻斬りの現れる町までの道は、常に武人でいっぱいになるようになった。

武人が募られてから一ヶ月、ある二人の侍が町についた。

一人の背の高い、明るい顔つきの侍は、腰につけた刀を見て、横に立っている侍に向かって、男は看板を指で指しながら言った。「沖野、本当にこの町に辻斬りが出るんだろうか？ほら、この看板を見てみる。この一ヶ月の間にもう何十人もの侍が殺されたっていうじゃないか。」

もう一人の沖野と呼ばれてる男は言った。「高倉、まさか俺が負けるとでも？そもそも、理由もなく人を斬る奴なんかには負けないさ。」

「まあ、確かにそうだな。もう俺たちの故郷からはずいぶん離れちゃったしなあ。今更戻れるわけでもないだろう」

「そういえば、この町には酒屋ぐらいあるだろう？そこに言ってみよう、情報がつかめるかもしれない」

「まったく、尤もな理由だが、俺はお前の魂胆は見え透してる。沖野、お前の酒好きには参るよ」

こういった会話を交わした後、二人は手当たりしだい、そこら辺にあった酒屋を見つけ、入った。

酒屋は奥に沢山の酒樽が並べてあり、席も適当な配置であつた。酒屋は武人たちが暇を持て余しているので賑わっていた。武人たちは、自分たちが狙われるまでの時間とお金を惜しみなく使っていた。辻斬りの犯人を捕まえれば莫大な賞金が出されるのだから、みんな自分がかまえらると思つていたのだらう。

沖野と高倉はあたりを見回して、適当な席に座つた。

すぐに酒屋のおやじが出てきた。酒屋のおやじはこれまた奇妙な人物であつた。また、酒屋にしてはおかしいほど体つきがよかつた。

「おやじ、すげえ体だな」

と、高倉は言つた。

「へへえ、毎日一人で切り盛りして酒樽を運んでいるもんで」

酒屋のおやじは髪の手が乏しい頭を手で掻きながら言つた。

「大変繁盛しているようだな」

と沖野は言つた。

「何しろ、この町にはここ以外、酒を売つてゐる所が無いんで・・・」

「何、この町にはここ以外の酒屋が無いのか！」

沖野は驚いて言つた。

「へえ、何故か酒屋も辻斬りの対象になつてゐるよううで」

酒屋のおやじはそう答えた。

高倉は探るように聞いた。「あんたは対象にならないのか？」

「あつしもいつ狙われるか分からないもんですよ。明日来たらいいかもしれませんよ！」

と、酒屋のおやじはからかうように言つた。「あんた方も例の辻斬りを狙つてきたんですかい？」

「まあ、そんなところだな」

と高倉は答えた。

「ところで、宿屋つてのはどつちだか教えてくれるかい？」

酒屋は道に飛び出して指を指した。

「あつちを左に曲がつて、ずっとまっすぐ行つてればはつきりあるんですよ、宿屋が。それはもう派手なものが」

「そんなに派手なのか？」

と、高倉は聞いた。

酒屋のおやじは、頭の側面を掻きながら言った。「その宿主がかなりの派手好きな人間でしてねえ。この前も新しい着物を買ったって話ですよ」

そうしてしばらく世間話をして、沖野と高倉は酒を頼んだ。酒を頼んで待っていると、誰かよっぱらった奴が暴れていた。

「ふざけんなよ、俺が辻斬りの奴なんかに負けるか！」

と、大柄の侍が言った。そして、酒を持ってきた酒屋のおやじに椅子を投げつけて、酒が不味いと文句を言った。そして、また叫び続けた。「度胸なしめ、夜出歩いて人を斬るなら、今度は俺を切つて見せるよ！返り討ちにしてやるわ！」

よっぱらいの仲間が周りではしゃぎ、叫んだ。

沖野は言った。「高倉、もう行こう」

「へえ、沖野、おまえが酒屋から進んで去るとは珍しいな」

「まあ、そろそろ酔っ払いすぎないうちに宿屋を探しておかなければ、そう思ってたなあ」

そして、沖野と高倉の二人は酒屋を去り、酒屋のおやじの通り、道を進んだら、古い建物に着いた。

「なんだ、大して派手でもないじゃないか」

沖野がそういい、中に入ると、座ってた宿主は、豪華絢爛な、趣味の悪い着物を着ており、見るからに世知辛そう、ずるがしこそうな人物であった。目はおどおどしており、落ち着きがなく、人と目をあわせようとしなかった。

宿屋のおやじは言った。「へい、何でしょう」

沖野は宿主と目を合わせようとしたが、何故かそらされた。「宿をとれるかな」

おやじは答えた。「上の奥の部屋が空いてます」

そうして、部屋に案内された二人は、とりあえず休んだ。

「どうやら、今回の課題は結構大きいらしいな」

と、一人が言った。

もう一人が答えた。

「ああ、そうらしいな。しかし、どうあっても遣り遂げたいものだ。ここまできて、こんなにも故郷から離れてしまったからな。役職からも、ただ辻斬りを許さないという理由に、辞めてしまったから。」

「すまん、やめるときお前まで巻き添えにして」

「何言ってるんだよ。昔からの親友じゃないか。今更何を言う」

二つの声はだんだんと小さくなり、眠気がさしてきた。月は綺麗な三日月であった。雲は星と共に流れ、どこかで狼が鳴いた。そして、夜が明けた。

朝方、目が覚めた二人は、布団を片付け、下の階に降りていった。食堂でみすばらしい朝食をとった。宿屋のおやじは昨晚と違う着物を、それも新しそうな着物を着ていた。

沖野は聞いた。「おやじさん、それ新しい着物ですかい？」

おやじはそうだと答え、そのままどこかへ行ってしまった。

朝の町は気持ちいいものだった。太陽がやっと出てきて、これからの一日に向けて気合を入れているようであった。沖野と高倉は、道を歩いていると、人ごみを見かける。

「おや、高倉、あれはなんだろうな」

「うん？ 沢山人がいて全然見えないぞ・・・ちよつと俺が見てくるから、な」

そういつて高倉は人ごみの中を押し入って中心にあるものを見てきた。

「高倉、人が沢山集まってるのは、あれはいつたいなんだったんだ？」

「いや、それが死体だったんだよ」

「何！ 例の辻斬りの被害者か！」

「ああ、それも昨日、酒屋で大暴れしていた奴だ」

「あの酒を撒き散らしてたり椅子を投げてたりしてた奴か！」

「そうだ。」

「それはバチが当たったんだろうが、気の毒にな」

そうして、沖野と高倉はまた酒屋に行った。

「まったく、沖野、また朝から酒か？」

「いや、そういうなよ。何か良い情報がつかめるかもしれないじゃないか」

「いい情報ね・・・」

酒屋のおやじがやってきた。「やあ、またあなた方ですかい」

沖野は答えた。「ああ、また昨日と同じ奴を頼むよ」

「へい、わかりやした」

そういつて、酒屋のおやじは奥に行き、やがて酒をもってやってきた。

「ありがとな」

といつて沖野はおやじにお金を渡した。

「へへへっ、どうも」

酒屋のおやじは意地汚そうにお金を握り締めて、奥に行った。

酒屋では、また誰かが自分こそが辻斬りを倒すものなりと、威張っていた。特に、沖野と高倉の近くに座って飲んでいた武士は、強そうであった。

「辻斬りめ、この草川様に勝てるもんなら襲ってみろっていうんだ！返り討ちにしてくれるわ！」

高倉は楽しそうに沖野に言った。「おお、沖野、凄いな。隣の席の方はかの高名な草川らしい。」

「ああ、一人で部隊を固体撃破していつて自分の軍を勝利に導いたというあの草川か。同じ北方からの出身というだけでも、鼻が高いな」

沖野と高倉は草川と話を始めると、三人はとても気が合い、ずっと喋り続けた。日が昇りきった頃、沖野と高倉は宿に戻った。そして、沖野と高倉は自分の席に戻った。

「おやじ、ここら辺には鍛冶屋つてのは無いのか？」

と、高倉は宿屋のおやじに聞いた。

宿屋のおやじは聞こえないふりをして聞き返した。「へえ、鍛冶屋ですか？」

「ああ、鍛冶屋だ」

「ここの鍛冶屋は有名ですよ……。何しろ、全国でもめったに無い、鉄を極度に撓めることが出来る老人が一人でやっていますからねえ。刃の部分だけでなく、刀の背の部分も強度を失わずにたわめることが出来るということです。その撓めた刀には、普通の刀では太刀打ちできないそうですよ」

「で、それは何処にあるんだ？」

「知りませんねえ……」

と、宿屋のおやじは知らん振りをした。

沖野が何かを高倉に耳打ちした。

高倉は懷の中から銭を取りだし、宿屋のおやじの顔の前にぶら下げた。「もう一度聞こう、鍛冶屋はあるのか？」

宿屋のおやじは露骨なまでに顔つきが変わり、目には銭しか映っていなかった。「この道を進んで、右に曲がって三つ目の角を左に曲がって、二つ目の角を右に曲がった四つ目の店ですよ……」

「うん、ありがとな」

高倉は銭を宿屋の手の中にいれた。

宿屋のおやじはそれをすぐに自分の懷の中に入れた。

宿屋のおやじが教えてくれたとおりの道順に行くと、とても古い建物に着いた。小さな店だった。中からは音がしなかった。

「誰かいるのか？」

沖野はそう言い、戸をあけた。

部屋の中は鉄の臭いが充満しており、壁には見事なほど、限界までに湾曲した、見事に撓めてある刀がいくつも飾ってあった。部屋の真ん中には動いているのかどうか分からない老人が一人、座っていた。

「おやじさん、生きていますか？」

と、沖野は聞いた。

「ちょっと聞きたいことがありますて……。今まで刀を撓めてあげた客の中に、侍ではなさそうな人はいましたか？」

老人はゆっくりと顔を上げ、沖野と高倉を睨んだ。「また辻斬り犯人探しの輩か……。わしは客のことは絶対に喋らん」

沖野は食い下がった。「そこをなんとか！」

老人は頑固で、譲らない。「だめだ。帰れ。お前らが負けるのは見えてる」

高倉は怒った。「なんだと！俺が負けるとでも？」

「まあ、まあ。高倉、抑えろ」

と、沖野は高倉をなだめた。

「ところで、その言い草じゃ、何か知ってますね？御老人。俺たちが負けるってのは自分が作ってしまった刀に自信があるからでしょう？それも、作った後に無理やり威嚇されて脅されたとか」

老人は眉をひそめた。「わしは何も知らない。帰れ」

「しかし、辻斬りのせいで沢山の人々が死に、しかもそのせいで沢山の人が悲しみ、沢山の人々が毎日、おびえて恐怖に生きているんですよ！」

と、高倉は言った。

沖野も付け加えた。「貴方が少し情報を提供してくれるだけで、沢山の人々が救われるかもしれないですよ！？」

老人は黙っている。

こんな調子で、説得はずっと続いた。そして、やっと、老人は口を割った。

老人は言った。「では、明日の朝に来なさい。情報を提供してあげよう」

「やった！」

と、高倉が言うと同時に、誰かが鍛冶屋の外で音を立てた。

高倉と沖野が誰かと見てみると、それは宿屋のおやじだった。

「何をしてるんですか」

と、沖野は聞いた。

宿屋のおやじは答えた。

「いや、何、ちょっと通りかかったんですけど、人ごみに押されてぶつかってしまったんですよ」

高倉があたりを見回した。「人ごみなんて、ほとんど誰も歩いてないじゃないですか」

宿屋のおやじは答えた。「いや、いますごく太った人が通っていたんだけど、角を曲がったんだよね。その太った人にぶつかられてね」「じゃあ、もう人にぶつかったりしないでくださいね」

と、沖野はいい、高倉と共に鍛冶屋の中に戻った。

「怪しいと思うか？」

と、沖野は高倉に小声で聞いた。

「誰が？」

「いや、宿屋のおやじだよ」

「辻斬りにか？」

「ああ」

「まさか。あの体格で出来ると思うか？」

「そうなんだが・・・」

その後も鍛冶屋の老人と高倉と沖野は話をした。何故撓めることで攻撃力が上がるのか、などの講座も受けた。沖野と高倉がお互いを褒めあいながら鍛冶屋の外に出ると外はもう暗くなっていた。

高倉と沖野が宿に向かって歩いていると、酒屋のおやじが細長い酒樽を持って歩いていて。「どうも。今晚は」

その目には何故か殺意のような冷酷な感じがあり、昼間とあまりにも違ったせい、沖野は寒気を覚えた。

沖野と高倉が宿屋に戻ると、宿屋の少し先で、またしても人ごみがあつた。

「まさか・・・」

高倉がそついい、また見に行った。「今度は草川が討ち死にしているぞ！」

沖野は、驚いた。そして、さっきの酒屋のおやじの目を思い出し

て、何も確信はなく、ただ心配になり、鍛冶屋の方へと足を運んだ。
「おい、何処に行くんだよ！」

と、高倉は問いかけた。

沖野は答えた。「鍛冶屋にだ」

「あゝ、食事が遠のいていく」

そして、沖野と高倉が鍛冶屋のある路地に着くと、鍛冶屋から出てくる影がひとつあった。月明かりが無かったせいで顔は見えなかったが、その人物は沖野と高倉を見るなり、路地を反対方向へと逃げ出した。その腰には、月明かりも灯りも無いのにギリリと光る刀があった。その男の衣服には、僅かだが血も見えた。

「高倉！奴を追え！俺もすぐ追いつく！」

と、沖野はいい、急いで鍛冶屋の方向へと走り、鍛冶屋の戸をあけた。

老人は事切れており、その姿は無惨なものであった。

沖野は怒り、先ほど高倉が追いかけた方向へと急いだ。

高倉が謎の人物とにらみ合っていたのは、三方向が壁になっている、路地の奥の奥の奥の袋小路であった。沖野は高倉に追いついた。
「へへっ、もう逃げられないぜ」

高倉はそういい、刀を鞘から抜いた。「沖野、老人はどうだったんだ？」

「死んでいたぞ・・・」

と、沖野は気を重くして答えた。

「じゃあ、こいつが犯人で決まりだな！言い訳のしようが無いぜ」
そのとき、月明かりが謎の人物の顔を照らし出した。そこにあったのは、奇妙といえば奇妙だが、普段昼間に見せる顔とはまったく違う狂気染みた顔の、酒屋のおやじの顔だった。

酒屋のおやじは言った。「まさか気付かれちまうとはなあ・・・」

「黙れ！何のために辻斬りをする！」
と、高倉は怒鳴った。

酒屋のおやじは突進しながら答えた。

「商売に邪魔な奴を消していったらやめられなくてよ！」

高倉は刀を酒屋のおやじの刀と合わせたが、なんと刀を合わせた瞬間、火花が散ったのだった。

酒屋のおやじは驚いた。

「ほほお、今回の獲物は手ごたえがありそうだな！」

「それはこっちの言うことだ！」

と、高倉が斬り返した。しかし、酒屋のおやじが微妙に刀を振ると、高倉の刀はひび割れ、壊れてしまった。沖野は自分の刀でギリギリ防いだが、それも壊れてしまった。しかし、沖野のは破片が酒屋のおやじの方に飛び散ったので、酒屋のおやじは一步で九尺ぐらいの距離を後ろへと跳んだ。しかし、これで高倉と沖野は素手であった。

高倉は言った。

「参ったな、予備の刀は宿だぜ……」

沖野も同じくであった。

酒屋のおやじは笑った。

「どうやって素手でこの撓めた刀を受け止める気かな？真剣白羽取りなどの下らない冗談はやめろよ」

高倉は心配そうに沖野を見た。

「おい、どうするんだよ。このままでは本当に冗談のまま死んでしまっぞ」

沖野は顔を青くした。そして、腰の鞘から一回り小さい刀を抜き出した。

「あまり気は進まないが……」

高倉は驚いた。

「おい、その撓み……もしかして、お前、鍛冶屋から盗って来たのか！？」

「ああ、そうだ……」

「やったじゃないか！いま俺、本当に死ぬのかと思ったよ！」
と、高倉は言った。

「お前の分もあるぞ。」

そういつて沖野は、もう一本の撓んだ剣を鞘ごと渡した。

「おお、お前は本当に気が効くな」

「・・・」

撓んだ刀を持った武士二人を前にした酒屋のおやじは、いささか顔色が悪くなつてきてたが、それでも突進してきてた。

沖野は頭、高倉は胸を狙ったが、二つとも人たちで弾かれてしまった。急いで刀を戻して防御しても、それが精一杯であつた。何処を狙つても、酒屋のおやじは人たちのもとに弾く、または防いでしまふのであつた。

沖野は言つた。「くそ、一発でも入れることが出来ればよろいも無いから勝てるのに！」

ついには壁に追い詰められた二人は、以前にまして真剣な顔になつていたが、それ以上に酒屋のおやじの鬼気がすごかつたのであつた。しかし、そのとき、沖野が壁にぶつかつたせいで、建物の上においてあつた樽が、建物がぼろたつた故に、一つ落ちてきた。それは高倉と沖野と酒屋のおやじの間に落ち、酒屋のおやじは少し動揺してしまつた。

その隙につけ込み、二人は転じて烈火の如く攻撃した。そして、一分ほど打ち合つた末に、ついに疲れを見せた酒屋のおやじは、一瞬の隙が出来、そのせいで斬られてしまつた。

胴体を血で真つ赤にして立つた酒屋のおやじは、上の月を見上げた。「わかつてたんだ・・・いつかこうなることぐらい、初めて人を斬つてしまつた時から。でも、やめられないんだな。この刀は・・・」酒屋のおやじは見事な撓んだ刀を沖野と高倉の方に投げた。「その刀は・・・お前さんたちが使ってくれ。もっといい事のために使ってくれれば、その刀も本望だろう」

そういつて、酒屋のおやじは血を吐き、倒れたまま動かなくなつた。

そして、それから一週間が経つた。

その後の捜査から、酒屋のおやじは町の中の同業者の暗殺の犯人

であり、また、宿屋のおやじも情報を沢山と提供する代わりに同業者を減らしてもらったり、討たれた人物の持ち物をもらい、換金していたことが分かった。犯人が捕まった日に鍛冶屋が殺されたのも宿屋のおやじが沖野と高倉を尾行して情報がばれそうになったのを宿屋のおやじに伝えたためであった。宿屋のおやじは打ち首になった。

酒屋のおやじは、別の藩での居合いの名門流派の師範であったとのことであった。ただ、とある不出来な生徒に喝を入れているとき、力余って殺してしまったのが原因である町にて職業も名前も変えて生活していたそうだ。

しかし、酒屋のおやじがもっていた刀に目がくらみ、刀を預かった大名はその後、半狂乱となり自殺してしまったそうだ。

犯人の討伐に「大いに貢献した」沖野と高倉は、沢山の褒美をもらって、北方の郷里に帰ったとのことだ。いまでも自分たちの村では英雄とたたえられているらしい。

（後書き）

出来は今ひとつの小説ですが、最後まで読んでくれてありがとうございます。
ございました。何でもいいので、アドバイス・注意・駄目出しなどが
あったらどうぞ言ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6431e/>

辻斬り

2010年10月28日07時52分発行